

偉人の生き様 死に模様

岡本太郎

(1911~1996)

さまざまな分野における世界の偉人たち。そんな彼らの今も語り継がれる生き方や、死に際に残した言葉などを紹介していきます。第11回は「太陽の塔」の建造や「芸術は爆発だ」「職業は人間」などの名言で知られている、20世紀を代表する日本の芸術家、岡本太郎。あらゆる分野の芸術に人生を捧げ、日本人が見たこともないような芸術作品を次々と発表していきました。奇抜かつ個性的な作品を数多く生み出した唯一無二の存在、岡本太郎のダイナミックな人生を紐解いていきます。

●「岡本太郎の原点」

岡本太郎は1911年2月26日、現在の神奈川県川崎市高津区にて誕生。父は漫画家の岡本一平、母は作家の岡本かの子、父方の祖父は北大路魯山人の師匠でもある書家の岡本可亭という芸術一家の一人息子として育ちました。中でも母親は非常に自由な芸術家で、子育ても家事もそっちのけで創作活動に勤しみ、恋愛にも奔放であったと伝えられています。後の芸術家、岡本太郎の原点はその特異な家庭環境と他ならぬ岡本家の人々だったのではないかと思います。彼自身、幼少時代から絵は好きで良く描いていましたが、中学に入った頃から「何のために描くのか」という疑問に苛まれ、迷いながらも東京美術学校(現 東京芸術大学)に進学。そんな時に父がロンドン海軍軍縮会議の取材に行くことになり、太郎も美術学校を休学し両親と共に渡欧。その後、フランスへ渡り、以後約10年間を彼の人生に最も影響を与えるパリで過ごしたのです。

●「パリでの生活」

芸術の神に導かれるようにして太郎はパリへと渡りました。多感な10代後半からの約10年間をパリで過ごし、太郎の芸術に多大な影響を与えました。パリ大学に進学し、哲学や心理学、民俗学などを学んだその時期こそが彼の芸術家としての礎となったと言われていいます。芸術への迷いがまだ続いていた21歳の太郎はある日、たまたま立ち寄った画廊でパブロ・ピカソの作品「水差しと果物鉢」を見て強い衝撃を受けたのです。しかし、その影響の受け方こそが彼が凡人ではないことを証明しています。それは「ピカソに感動して運命をひらく以上、まったくピカソとは反対の表現をとる。つまり、ピカソに挑み、乗り越えて、むしろ、反ピカソでなければならぬ」と、ピカソを超えることを決意したのです。後に日本に新風を吹き込む唯一無二の芸術家、岡本太郎という存在の片鱗が伺えます。

●「日本での活動」

1940年、第二次世界大戦の影響を受けた太郎は余儀なく帰国を強いられます。彼自身も帝国陸軍の兵士として中国戦線へ出征。そして、終戦後の1947年によく画家としての活動を本格的に再開させたのです。当時36歳の太郎は新聞に「絵画の石器時代は終わった。新しい芸術は岡本太郎から始まる」という宣言を発表し、日本の芸術界に挑戦状を叩きつけたのです。翌年、花田清輝と出会い、文学と美術のジャンルにまたがる前衛芸術の研究会とも言える「夜の会」を結成。これまでの日本の芸術界では見たこともないような作品を数多く制作し、発表していきました。1954年には著作「今日の芸術」を出版するなど文筆家としても活動。絵画はもとより多方面においてもマルチな才能を発揮させ、芸術家、岡本太郎の名を不動のものにしたのです。そして1970年には大阪万博のテーマ・プロデューサーに就任。「とにかくべらぼうなものを作ってやる」と構想を練り続け、シンボリックかつ壮大な「太陽の塔」を制作させました。晩年も創作意欲は衰えず精力的に活動しましたが、1996年1月、パーキンソン病による急性呼吸不全により死去。84年の人生に幕を下ろしました。

なんでもいいから、まずやってみる。
それだけなんだよ。

日本の芸術界に革命を起こした岡本太郎。そんな彼の足跡を辿ると、自分の感性、本能にとっても正直で、信じた道を一直線に逞しく歩き続けた姿が浮かび上がってきます。「面白いね、実に、オレの人生は。だって道がないんだ。眼の前にはいつも、何もない。ただ前に向かって身心をぶつけて挑む瞬間、瞬間があるだけ」「なんでもいいから、まずやってみる。それだけなんだよ」「危険だ、という道は必ず、自分の行きたい道なのだ」。そんな岡本太郎が残した名言の数々にはどれもチャレンジ精神にあふれる熱い言葉が並んでいます。それは、原色と原色がぶつかり合うエネルギッシュな彼の作風そのもの。岡本太郎が時代を超えても多くの人を魅了するのは、彼の個性的なキャラクターもあるでしょうが、その中に潜む「熱い魂」に惹かれるからではないでしょうか。